
無名の刻

つん汰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無名の刻

【Nコード】

N9209P

【作者名】

つん汰

【あらすじ】

四月……月詠学園大学へと通う事になった安部周樹は、登校初日に魔獣から襲われる事になる。そこに通りかかった女性……藤原巫女斗に助けられる。

巫女斗に、この世の理を伝えられ、また封術師としての力を授けられ、この異常を正す事にした周樹。

今、悪魔との死闘が始まる。

春の異常

「はぁ……はぁ……」

やった！やったぞ、ついに手に入れた！この札があれば俺は、事実この世界を得る。

この碌でもない世界を、この閉ざされた世界を、この囲われた世界を！

俺はもう読み手に自由に操られる駒じゃない。俺がこの世界の読み手になるだろう。

「ふふ……ふはは！」

俺が、俺が明王になるんだ。

＊ ＊ ＊

ピ。ピ。ピ……ピ。ピ。ピ……。

朝、電子音で目覚めたのはこの部屋の主、あべしゅうぎ安部周樹である。

「うるさい……」

ピ。ピ。ピ……ピ。ピ。ピ……。呟いただけでは目覚まし時計は止まらない。

ベッドに備え付けられた机に手を伸ばすが、そこに目覚まし時計はない。そう言えば昨日起きないといけないからってパソコンデスクの方に移動したんだったか……。

ピ。ピ。ピ……ピ。ピ。ピ……。

「ああ、もう分かったから黙れ！」

怒りに任せ布団から這い出、そして力任せに目覚まし時計の頭を殴る。……やっと沈黙したようだ。

「眠い」

春眠暁を覚えず、とは上手く言ったものである。今朝もぽかぽかと冷たさの中に春の陽の暖かさがある。

キッチンに立ち、朝食を作る。と言っても、簡単な物で済ませているので、今日も例外なく、パンとハムと目玉焼きだ。

そして今日から通うことになる、月詠学園大学の入学パンフレットで地図を何度も確認する。

「よし、準備は大体OK」

そう言って、周樹は部屋を出た。

それにしても暖かい日だった。部屋の中で寒いと感じたのは、部屋の向きでまだ太陽が差し込んでいなかったからだろう。一人暮らしには色々と制約が付くものだ。

ふと、視界の隅を黒い物が横切った。何かと確認する前に背中に激痛が走る。

「かっは……」

続いて腹に激痛。腕に、脚に。まるで弄ぶように体中を激痛が駆け巡る。

なんだ、何が起こってるんだ、一体僕はどうした。

そんな疑問が頭を駆け巡る。

クソ、どうしたら、どうしたらいいんだ……。

次に目を開いた時に、その物体を目に留めた。

それはどう形容していいかもわからない、異形だった。

ぬめぬめとてかりを帯びた体、目は四つ、顔らしきところにある。

犬と言えなくはない体躯。

一体なんだ、これは。今まで生きていた現実と、今向き合っている現実の理解が追いつかない。

そんな事を考えている所に、その魔獣は止めを刺すのだろう、思い切り突進してきた。

ガリン——その音は僕の体からではなかった。今まさに殺されようとしていた僕の体と、殺そうとしていた魔獣の体の間に、何者かが割り込んでいる。

どうやらその何者かの刃が魔獣の必殺の一撃を止めたらしい。

「……！」

声にならない声が僕の喉から上がった。

そして、その何者かは懐から……あれは札か？を取り出し、魔獣に押し当てる。

ウオオオオン……と一鳴き鳴いて、魔獣は光に包まれて消えた……。

それは、僕の周りで起きた異常の一端でしかなかった。桜が舞い散る四月の出来事である。

出会い

ウオオオオン……魔獣は鳴きながら消えた。

札をかざした女性がこちらを振り返り、何か問いたげな眼差しを浮かべる。

女性……と言っても僕よりは年下であろう、華奢な体躯に、つぶらな瞳。背は最初割り込んだ時の威圧感がなんだったのかと思うほどに小柄で、どこか子供っぽさを感じる仕草。余り見つめられると照れてしまうような可愛らしい少女だった。

「あのー……」

こちらのセリフを待っていたのかのように、つぶらな瞳を大きく開いた。

「初めまして、周樹くんだったよね？私は、藤原ふじわら巫女斗。巫女って呼んでね、気に入ってるから。私は君の事を周くんって呼ぶからよろしく。あとあと、色々質問あると思うけど、とりあえず私に付いてきてくれると嬉しいな」

一気に捲し立てられてしまった。

……待て、今僕の名前を言ったな？何故知っているんだ？初めて会ったとは思えないような素振りだったし。この娘、一体何者だ？「あ、周くん。質問本当になしでお願い。この場に立ち尽くすと不味いんだ。私の後に付いてきて」

そう、二回目も間違いなく僕の名前を呼んで、巫女さんは歩き出す。街に降りるかと思いきや、路肩を飛び越して、山へと分け入った。

まだ体のあちこちがひりひりと痛み、混乱中の僕は、言われるがままに彼女の後を付いて行った。自分の素性を知る彼女がなんとなく気になった

そのままずんずんと山を登っていく。坂は思ったよりも急ではなく、なだらかに続いていた。

山の中腹だろうか？そこで巫女さんは足を止める。そしておもむろに一枚の札を翳し、何かを唱えた。

すると、それまで鬱蒼と茂っていた木々たちが回りはじめ、一本の道を作り、そこに祠が現れた。

「周くん、どうぞ中へ」

言われるままに祠の鳥居をくぐる。その刹那、体の芯にひやりとした感触があった。危ない所なのだろうか？

「あ、大丈夫。それはなんていうのかな、現世落として言うのかな。そう言うものだから」

と言われても何を言っているのか全然わからないのだが……。

そして二人が祠の中に入ったと同時に、また木々たちが回りはじめ、祠までの道を防いだ。

どうしたものか。これは逃げるに逃げれなくなってしまった。もしかしたらこの娘は先ほどの魔獣の仲間で、ここで僕を頭から食らうのかもしれない。

と、僕がそんな事を考えているうちに、彼女は居住まいをただし、祠の神棚の方に正座して座った。

「改めまして、初めまして、安部周樹くん。私は藤原巫女斗。此処で封術師っていうのをしています。と言ってもまだまだ修行中なんだからどね」

「……………」

「怖い顔しないでよ。助けてあげたはずだよ？今からあなたの疑問に全部お答えします。だからなんでも聞いてね」

「まず、なんで僕の事を知っている？それにあの本の中でしか読んだ事の無いような魔獣は何？」

「なんでって言うても……周くんが私に名乗ったからだよ。覚えてないのも仕方ないか……。あの魔獣は私たちは封^{封敵}獣と呼んでいます。最近活動が激しくて、私みたいな素人に毛が生えたような者でも繰り出されて困ってます」

そんな私的事情を挟まれても困る。それに僕が名乗ったって？い

っ？どこで？

「周くんが名乗ったって言っても、覚えているはずないよ。昨日のようなことで何年前かもしれないし、何千年かもしれない。君は忘れるべくして忘れているんだよ」

さらに意味がわからなくなってしまった。彼女は一体何を言っているんだ？

「とりあえず、なんで僕を此処に連れてきたの？」

「それは簡単です。――君にも封術師として、私たちと一緒に戦って欲しいの」

何を言っているのか、さらに混乱してしまった。僕が魔獣と戦うだって……？

「さっき、現世落として言ったよね。その感覚がある人……私や周くんは、封術師としての資格があるんだよ。それにさっき鳥居潜っただけで、現世落としを感じたよね？周くんは他の追隨を許さないほど、強い力を持っているってことなの。……これに触れてみて」
と言って彼女は懷から一枚の札を出した。そっと触れてみる。先ほど感じた、ひやりとした感触より一層冷たい感覚が体の芯を走った。

「うっ……」

「大丈夫。少しの我慢だよ」

そうして彼女は僕の手を手を重ねる。

いくら経っただろうか？札だと思っていたものが段々と形を成し始める。

それは四本の短い足に、細長い胴、小さな頭を乗せた、いわゆるダックスフンドの形をしていた。

「なんだこれ……？」

「これが魔獣。色んな魔獣がいて、この子はまだ幼獣だよ。きっと周くんの役に立つから、貸してあげる」

完全に形を現した幼獣が、声を上げる。それはなんと人の声を持っていた。

「我が主人は貴様か。名を名乗れ」

「なんだ！？犬が喋った！」

「犬畜生などではない。我はケルベロス。審判の門を守る者」

「えっ！！」

僕が息を呑むと巫女さんがこの魔獣について説明をした。

「そう、ケルベロス。ケルちゃんって呼んでいいよ。きっとこの子も喜ぶ」

「ケルちゃん……僕は安部周樹。えっと……よろしく？」

おずおずと言った感じで僕がケルベロスに話し掛ける。

「ふん…安部の末裔か、悪くない」

ケルちゃんと呼んだ事について余り突っ込みがない。巫女さんが言うように本当に気に入ってるのだろう。それにしても安部の末裔ってなんだ？

「あはは、ケルちゃんに気に入られたね、周くん」

巫女さんはなんだか喜んでいようだった。

「これで、封術師としての資格は大体そろったよ。私たちに手を貸して、お願い、周くん」

そう言っ巫女さんはうるうると目を潤ませた。つぶらな瞳いっぱい涙が浮かぶ。……この顔で落とせない男はいないんじゃないか……？

「わかった。もうちょっと詳しく話を聞かせてください」

そして、僕も落ちた中の一人だった。

四月の異常はするすると音を立てずに始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9209p/>

無名の刻

2011年1月4日05時10分発行